



朝賀 昭 氏



No.335 平成29年9月15日発行  
発行・編集 連合駿台会

発行人 広報委員長・齋藤柳光  
編集人 事務局・矢嶋まゆ子  
〒101-052 千代田区神田小川町三十二  
明治大学「紫紺館」内  
電話 (〇三三) 三二九六一四七四七  
印刷 有限会社 美 創

## 連合駿台会七月例会

「田中角栄元総理の『お庭番』として」

政経調査会会長 朝賀 昭氏

連合駿台会平成二十九年七月の例会を、七月十九日(水)十七時四十五分より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、朝賀昭氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

先ほどの理事会でも報告したが、連合駿台会の目的の大きなことの一つに「大学の発展に寄与する」ということがある。現在、当会としてもいろいろ新しい発想を持って、大学支援のあり方について検討すること、大学目標に、先月、「大学支援のあり方検討委員会」というものを立ち上げ、二十四名のメンバーの方々に、四つの分科会に分かれ討議を

重ねていただいている。一定の方向性が出たら、皆様方にご報告したいと考えている。

大学関連では二つほどお話ししたいと思う。

一つは、二〇一六年度の学校法人明治大学の決算が先月発表され、ここ数年は赤字体質であったが、今年度は一般事業会社で言うところの「純利益」が、六年ぶりに十四億六千万円の黒字となった。その要因は、今年の志願者は十一万五千人ほどで、前年よりも約一人人増えたということ、それと同時に大学側も光熱費等の固定費の節約をかなり徹底したことが功を奏して、このような成果を上げることができたということだ。

二つ目は、最近、「東洋経済」の『大学通信』が、全国の進学校二千校の進路指導教諭に対して行った「生徒に人気の大学」のアンケート結果を発表した。一位は三年連続でわが明治、二位は早稲田、三位は青山学院、四位が慶應、五位は立教、六位が法政で、以下、京都、東京、東北などの国立大学が続く。三年連続というのは素晴らしいことで、それだけ若い人たちが大きな期待が寄せられているということだろう。一方、昨年十位の法政が六位まで順位を上げたことは、受験科目が三科目から二科目に減ったことが、受験生にとっては魅力なのかもしれない。同様に五位だった青学が慶應まで抜いて三位に入ったことは、箱根駅伝三連覇なども大きく影響

しているとやるだろう。もちろん私の憶測に過ぎないが……(笑)。明治の競争部はここ二、三年成績が振るわないので、大学側にもう少しカネをかけても強化すべきと要請しているのです。来年の正月は少し期待を持てるのではないかと楽しみにしている。

本日の講師は、田中角栄元総理大臣のお庭番として二十三年間仕えられた朝賀昭氏である。おそらく私たちがまったく知らないお話も伺えるのではないかと楽しみにしている。また本日は暑気払い例会でもあるので、最後まで楽しんでいただきたいと思う。当日の講演の要旨は以下の通りです。

### 私の人生は、六文字の肩書、がすべて

一 昨年の十二月十六日は田中先生の二十三年忌であった。先生が亡くなられて二十年が過ぎて、『角栄のお庭番 朝賀昭』を世に出したことで、私は「お庭番」としての禁を犯したことになる。この理由については後でお話するが、田中先生の成功、失敗体験を含めたその生きざまを語ることに、この国難を打ち破るヒントが詰まっているのではないか？ 国家の舵取りが難しい時代に、少しでも世のため人のためにつながる政治が実現したい、それが田中先生の再評価にもなると信じたい、という思いは込めたつもりだ。

講演をするに先立ってお話ししておきた

いことは、私の立ち位置はセンターであつて、レフトでもライトでもない。ただし自由民主党という組織の中で育てられたことは事実であり、今日も二階幹事長と話をした。また、細野豪志君には次代の牽引役として何とか頑張ってもらいたいという思いから、十五年前から応援し続けてきた。私が持論、たとえば自公政権や世襲政治家に対する批判などを語ると、必ずと言っていいほど、どなたかの関係者につつかつてしまう。皆さんの中でお付き合いのある方がいらしても、どうか不快とは思わず、戯言という感じで聞き流していただければありがたいと思う。

昭和三十六年、田中先生は第二次池田勇人内閣で自民党の政調会長に就任した。当時、私は国会議事堂の坂の下にある高校の三年生で、割のいいアルバイトがあるという先輩の口車に乗って、衆議院のアルバイト応募したことが私の人生が狂った(?) 原点だった。そこで自民党に振り分けられ、たまたま政調会長室の配属になった。初めて田中先生にお会いした時、まず「君、出身はどこか？」と尋ねられた。「港区の芝浦です」と答えると、「では、親御さんは?」、「父親は静岡県浜松、母親は新潟県の柏崎です」、「何、それはオレの選挙区じゃないか。では今日から頼むわ」……というような具合で始まった。

ある時、「朝賀君、君はこの大学を受け

るのか?」と聞かれた。当時、高校卒業後は子供の頃からの夢だった板前になろうと考えていたので、「大学は行かないんです」と答えると、先生は「君のような進学校に行っているやつが、どうして大学に行かない? 若いくせに学問をおろそかに考えているとは何事だ。そんなやつは出入り禁止だ!」と凄じく剣幕で怒られた。というわけで、行きたくて大学を受けたのではないが、運よく中央大学に入学することができた。数日後、「大学に行くことにしました。卒業したら先生の秘書として雇ってもらえますか?」と尋ねると、田中先生はニッコリ頷いてくれた。

先日、浅田真央さんが「フィギュアは私の人生です」と言って現役を引退したが、私の人生は「田中角栄秘書」という六文字の肩書、がすべてで、生活の糧もすべて田中先生の給料で賄ってきた。「人生が田中角栄」という意識は変わらないが、亡くなってはや四半世紀が過ぎ、近頃、冷静に田中角栄という政治家を分析し、見ることができるようになったように思う。

冒頭にも述べたように、私が禁を犯した理由には二人の人物、石原慎太郎氏と大勲・中曾根康弘氏が出された出版物に目を通したことがきっかけだった。私がまだものを言えるうちに、きちんと話しておかないと、あの世に行つてから、オヤジに叱られるな……、と

いう気がしたのだ。『中曾根康弘が語る戦後日本外交』（新潮社刊）の中には、「田中角栄君が、嫌がる背中を追っかけて、日中国交回復に取り組めば、来る総裁選で君を応援しよう」という下りがあるが、これはまったく事実と反する。もう一人石原氏は『天才』の中で「オレは田中には一度も世話になったことがない。田中とは一線を画していた」と言っていたが、どうしてこんなウソを書いたのか……。「見ざる、聞かざる、言わざる」は秘書の掟の鉄則だが、これだけはきちんとしておかなくてはならないと思っただのだ。

### 雪国の豪雪の苦しみから解放する

昨年くらいから田中ブームが起きている。もちろん『天才』がベストセラーになったことがきっかけだが、その前からも結構本が出されている。調べてみたところ、『天才』出版以前、没後二十年くらいまでの間に、なんと百三十冊もの『田中本』が出版されていた。今年五月に『田中角栄最後のインタビュー』という本が出版されたが、これは百九十四冊目になる。ただ、これらのほとんどが虚実であり、いい加減なことを書いたものが多いことには驚かされる。たとえば政治家が著したもので、実際に田中角栄と交流のあった人は七人しかない。真実を書いているのは『角栄のお庭番 朝賀昭』だけだと自負しているし、ほかでは、「越山会の女王」

と言われた佐藤昭子さんの『私の田中角栄日記』と、その娘・佐藤あつ子さんの『昭田中角栄と生きた女』は、かなり史実に沿っている。また『田中角栄最後のインタビュー』も、なかなか読み応えのある一冊である。

これほどに田中先生の本が売れる理由、またいまだに話題にされ続ける理由を考えてみると、ある結論にたどりついた。私自身、自分が仕えて最良目とはいえ、後にも先にも田中角栄を凌駕するような政治家には会ったことがない。政策立案能力や議員立法、選挙の強さ、自分の多さ、カネの使い方などがどれもトップクラス。まさに「政治家のチャンピオン」だから、これまでに百四十冊も書かれた。いくら演説が立て板に水でうまくても、中身が薄っぺらでは子分なんて集まらないし、チャンピオンにはなれないんだ……と。つまりオリンピックの「キング・オブ・アスリート」（近代十種競技のチャンピオン）になぞらえれば、先生はまさに「キング・オブ・ポリテイシヤン」、あるいは「キング・オブ・ステイツマン」なのだということだった。

名著『職業としての政治』で、マックス・ウェーバーは情熱と責任感、判断力の三つが政治家に重要であると説いた。リチャード・ニクソン元米大統領は自著『指導者とは』において、偉大な政治指導者には洞察力と先見力などに加えて何よりも決断力が不可欠だと

記した。田中先生はそれらを兼ね備えていた。そこで私なりに考えた「政治の十種競技」なるものから、いくつかをお話ししたい。

まずは「情熱」。これは天下国家、国民のために自分が何をなし得るか、何をしたいか、そこに政治の原点（一丁目一番地）があるのだと思う。田中先生は常に「君たちは政治家になりたくて政治家になつてはいけない、政治家になつて何をしたいか、それが最も大事なことなのだ」と言っておられた。田中先生の「一丁目一番地」は「克雪」だった。母親の実家があった関係で私も新潟に疎開したことがあるが、越後の冬は本当に暗い。囲炉裏の火が灯り代わりという生活で、働ける男はみんな出稼ぎに出てしまい、集落には老人と女子供しかいない。雪によるハンディを政治の力でもって解決する、これこそが田中先生が二十八歳で立候補した時の原点だった。

昭和三十八年には、豪雪に災害救助法を初めて適用、四十六年には、特別豪雪地帯に補助金を支給する制度を創設した。同年、通商産業大臣に就任し、大臣秘書官になった小長啓一さんに対して「君は、雪をどう思うかね」と問いかけ、戸惑う小長さんに、「君も知っている通り、ワシは越後の出だ。雪が降ることと親子や夫婦が半年の間、離れ離れになって生活しなきゃあならんのだよ。そういう働く場所のない彼らを、雪国の豪雪の苦



しみから解放することが、ワシの生涯のテーマなんだ。君はそのことを肝に銘じて、仕事をやってくれんか」、こう言ったそうさ。

そして「政策立案能力」。日本の国会において成立する法律案の大多数が内閣提出のもので、各省庁の職員が作成し、国会の議決を経て成立するため、役人主導になりがちだ。

一方、議員立法は、国会議員が新規に法律を作ったり、既成法律の改正案を作ったりして、国会の議決により成立する。田中先生は四十三年間の国会議員生活の中で、議員立法として自らが法案の提出者となり成立させたものは、実に三十三本に及ぶ。最初に作成したのは、戦後の劣悪な道路を直すことを目的とした、いわゆる「揮発油税道路特定財源」。政治家になって五年、当選三期目の三十三歳の時で、大蔵省（当時）もGHQも猛反対する中、見事にやってのけた。

田中先生は、長く続いた官僚政治に風穴を開けたと言われるが、党政調査会を務めて以降、党政務調査会は議員が切磋琢磨して政策を学ぶ場となり、政策立案と決定作業に深く関与するようになった。しかも、先生は官僚の人心掌握の極意を知りつくしていた。

ほかでは「スピード出世」。早く要職に就かなければならないのはもちろんだが、この兼ね合いが難しい。そのまま巣立っていけるスピードなら問題ないが、経験不足が災いし

てプレッシャーで潰れてしまっただけは、元も子もなくなってしまう。田中先生は戦後最年少の三十九歳で第一次岸内閣の郵政大臣に就任したが、それでも初当選から十年かかっている。さらに「要職の在職年数」も、政治家資質のカウントの中で占める地位は高い。

「わが人生に悔いはなし」

先ほど私は、自分はセンターだ、と申しあげたが、私のスタンスは「改憲論者」、そして「二大政党討論者」、「政権交代論者」である。こう言うとしても野党寄りになっただけで、そういう意味では、小沢一郎さんに近いのかもしれない。小沢さんについてはいろいろ言われるが、ただ今の野党内には本当に政治をわかっている人が少ないから、小沢さんを使わなければやっていけないのではないか？とも思う。政治でも事業でも、経験を積んだ先人の知恵や力を借りないと難しいのではないかと気がする。

話は戻るが、いまこのように取り沙汰される最大の理由は、やはり、田中政治には情があつた」と考えられているからだろう。総理になる少し前、先生は、「君たち、そこに困った人がいるのに、助けてやろうという気持ち起きないヤツは政治家になんかちやダメだ！」と言っていた。これが基本だと思ふ。そういう人柄が、たとえば不倶戴天の敵であった不破哲三元共産党書記長にす

ら、歴代首相では田中角栄が一番、と言わせたのだと思つている。

戦後六十年目、日本に貢献した人物のアンケートを取ったところ、田中角栄、吉田茂、佐藤栄作、松下幸之助、中曽根康弘、池田勇人の順だった。十年後の七十年目、業

### 【講師略歴】

朝賀 昭（あさか・あきら）

一九四三年、東京都生まれ。都立日比谷高校時代に田中角栄自民党政調会長（当時）の知己を得て、中央大学法学部を卒業した一九六六年に正式に秘書となる。

以後、田中角栄氏に二十三年間側近として仕えた。田中派秘書会千人を束ね、政策実現、選挙の強さで他に類を見なかつた田中軍団を支える。その情報収集力、実行力、交友関係の広さはずば抜けており、現在も数多くの政治家が指導を仰ぐ。

昨年最大のベストセラーとなった田中角栄元総理を描いた石原慎太郎氏の「天才」は、朝賀氏の著書「田中角栄 最後の秘書が語る情と智恵の政治家」や、同氏のインタビューをもとに構成された「角栄のお庭番 朝賀昭」の内容が主な参考文献となっている。

田中角栄元総理が再び脚光を浴びる中、テレビ番組への出演や「日刊ゲンダイ」の連載で、側近として仕えた秘書であった同氏しか知りえない田中角栄元総理の実像を語る。朝賀氏による話はまさに日本政治史に残る歴史の瞬間の真実であり、お庭番、であるからと、最近まで表舞台に登場することを控えていた同氏の話により、明らかにした新事実も多い。

績を評価する歴代首相」を尋ねると、田中角栄は一位だったが、二位は小泉純一郎……、時代は変わったものだとつくづく感じた。

田中角栄は毀誉褒貶が激しい。好きな人もいれば嫌いな人もいる、評価する人もいれない人もいる。ただ、私は人生を懸けてお仕えして、裕次郎の歌ではないが、「わが人生に悔いはなし」なのである。

#### ◆広報委員会からのご案内(理事会議事録)

日時：平成二十九年七月十九日(水) 十七時  
場所：明治大学「紫紺館」(二F会議室)

#### ○新入会員承認の件

高澤組織・会員増強委員長から、本日は藤田元宏氏(ユナイテッド・スーパーマーケット・ホールディングス(株)・代表取締役社長)、藤本和秀氏(株)阪急阪神ホテルズ・代表取締役社長、一般社団法人日本ホテル協会理事)、渡邊和男氏(株)SEC・代表取締役社長、明治大学ラグビー部OB倶楽部副会長)、金井健氏(全国農業協同組合中央会・常務理事)、久米正明氏(株)リソー教育・取締役副社長)の五名が推薦されており、委員会では全員について入会を承認した、という報告があった。これに関して、全員異議なく承認された。

#### ○各委員長より報告事項

各委員会から、順次報告があった

〈総務・事業委員会 河村委員長〉

五月理事会以降に実施した事業としては、六月十六日には、新橋「新橋亭」において初の試みとして「グルメ交流会」を実施。これはもともと組織・会員増強委員会が担当する「若手の会」と称して発足したものだだったが、年齢制限を外し、全員参加できる親睦会として。参加者は三十六名で、食事を楽しみながら着席形式で歓談できると好評だった。

今後の年内の予定としては、十月度は、十八日(水)に第九回ビジネス勉強会、二十八日(土)は親睦バス旅行(山梨県のサントリイ登美の丘ワイナリー等を見学)を予定。十一月度は、七日(火)に第十二回のオープンゴルフコンペ(於：戸塚カントリークラブ)、十五日(水)は忘年会例会で、講師は未定だが、決まり次第ご連絡する。

〈組織・会員増強委員会 高澤委員長〉

新入会員の入会状況についてご報告する。昨年度ご承認いただいた方で、手続きが今年度に持ち越された方八名が入会、さらに五月の理事会、本日の理事会で承認された方が十三名おられるので、二十一名の方の入会が見込まれる。四月一日時点での会員数は三百三十一名、今期に入ってから退会者は四名なので、結果、現時点では十七名の純増と

いうことになる。

ご案内の通り、本日の例会には七名の方が新しく参加される予定で、さらに今期の委員会方針(入会を希望している同伴者の例費の一回分は委員会で負担する)の第一号となる同伴参加者も一名いらっしゃるので、皆様のフォローをお願いしたい。今後とも身近な方で推薦するに相応しいと思う方がおられたら、ご連絡いただけたらと思う。

〈広報委員会 齋藤委員長〉

広報委員会からは、ホームページのリニューアルについてご報告したい。まず、サーバーの補強、さらにスマホに対応できるような紙面の刷新を図っているが、ちょっと手間取っており、秋頃までには新鮮にデビューしたいと思っている。内容としては、先ほど総務・事業委員長から報告されたような今後の予定を、決定次第ホームページでいち早く発表する、さらには今までの思い出の写真を数多く掲載して、皆様に親しまれるものにすることを目指している。

〈大学支援委員会 浅井委員長〉

担当各事業の進捗状況を項目別に説明・報告させていただきます。

第一に「学術賞・学術奨励賞」は七月から募集を開始しており、締め切りは十月六日。募集内容については在籍十年未満の若手研究者に加え、女性の研究者、スーパードローバ

ル大学創生支援の意味から外国籍の方にも積極的にアプローチしたいとする方針である。そのためネット上の案内のほか、特別にリーフレットを作成して、先生方にも配布している。締め切り後に選考委員会に諮られ、最終的には十一月十五日最終選考委員会で決定する。例年通りだと学術賞一名、学術奨励賞二名ぐらいが上がってくると思われる。

第二に「寄付講座」については、春期は時事通信社・西澤豊相談役（前社長）を講師に迎えて、六月二十日に好評のうちに終了。希望者が多かったため、場所をアカデミーコモン三階・アカデミーホールに変更して開催された。秋期寄付講座の講師はユーハイム代表取締役社長・河本英雄氏に決まり、十一月九日（木）に開催する予定。

第三に「フューチャースキル養成講座」は、七月半ばで予定通りの成果をあげて全講座を終了し、八月八日に、参加企業の講師の方々、先生方、一部我々も加わって、反省会とこれからの課題について討議をする。商学部から申し入れがあった、優秀な学生グループの表彰や参加各企業への礼状贈呈等の具体的な進め方についても話し合われる予定。

第四に「留学生支援」については、昨年同様、春期・秋期修了式の際に記念品を贈呈する予定。今年度は若干人数が増えて、春期・秋期合わせて二百七十一名になったが、当委

員会の大前氏のご尽力もあり、少ない予算の中から、昨年と同等のもの（「連合駿台会」をプリントしたステンレス製ペットボトル）を贈呈することができた。春期修了式は七月三十一日、当会の説明と会長メッセージを入れた文章を添付して渡すことになっている。

第五に、ホームカミングデー・お茶の水JAZZ祭・シェイクスピアプロジェクトの協賛については粒来通りで、予算額通りの支援を行う予定。

#### 〈財務委員会 坂田委員長〉

すでに皆様方のお手元に年会費の請求書が届いていると思うが、六月から七月にかけて、七、八割方が入金されるかと思う。大きな方針としては、次の議案で説明がある「大学支援のあり方検討委員会」との情報交換を密にして、できる限りの支援を検討していきたいと考えている。

#### ○「連合駿台会 大学支援のあり方検討委員会」の設置について

同委員会の委員長に就任した武田宣夫顧問から、以下のような説明があった。

冒頭の挨拶で会長からも話があった通り、五月の理事会で報告があった「連合駿台会大学支援寄付金窓口開設検討委員会」については、寄付金窓口開設についてさらに検討を重ねるべく、この委員会を発展的に解消し、新

たに大学支援そのものを、もっと幅広くあらゆる角度から検討することを目的に「大学支援のあり方検討委員会」として、新たに立ち上げ、継続検討することになった。

第一回（六月十二日）、第二回（七月三日）に全体会議を開催、今後のスケジュールとしては、第三回からは四つのテーマごとに分科会を設けてグループごとに討議（七月二十四日、八月二十一日、九月四日を予定）、第六回（九月十一日開催予定）の全体会議では、各分科会の討議内容を報告しあつて、十一月頃までに会長に答申、理事会に諮ることを目指している。

各分科会のメンバーは以下の通り。

（※敬称略・リーダー以下は卒年順）

☆スポーツ・ボランティア（応援・協賛・財政支援等）

リーダー・有賀隆治、石原道勝、小山修、安達明正、宮本浩二

☆機能（産学連携事業・企業家支援・IT&AI関連事業・金融工学・リスクテイク事業・マーケティング等）

リーダー・高澤徹、坪昭二、齋藤柳光、松崎優子、大原幸男、古賀慎一郎

☆就業支援（海外&国内・留学生支援・業界説明・人脈作り・就職）

リーダー・浅井宏、青柳勝栄、関根均、高橋郁夫、大野正美



☆カネ（寄付金・基金FUND・支援金・運用・奨学金等）

リーダー・栢森靖、佐藤健、坂田英夫、富水流孝二、当山明彦、河村博

※武田宣夫委員長・伊原敏雄副委員長は、各分科会には属せず、オブザーバー参加。

田村駿会長・上西紘治専務理事は、全体会議のみ出席。以上

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方を紹介します。（敬称略）



藤田 元宏  
昭和三十五年・政経学部卒  
ファイナンス・マーケティング・ホスピタリティ  
代表取締役社長  
茨城県桜川市在住



渡邊 和男  
昭和五十五年・政経学部卒  
㈱SEC・代表取締役  
東京都品川区在住



藤本 和秀  
昭和四十九年・政経学部卒  
㈱阪急阪神ホテルズ  
代表取締役社長  
兵庫県芦屋市在住



金井 健  
昭和六十二年・農学部卒  
全国農業協同組合中央会  
常務理事  
東京都世田谷区在住

◆明大ニュース

●「和泉国際混住寮(仮称)」を来春開設へ

外国人留学生と日本人学生が共に生活する「学びの場」

明治大学は国際化の推進、共創的学習・教育の推進の一環として、主に文系学部の一・二年生が通う和泉キャンパスに「和泉国際混住寮(仮称)」を整備し、二〇一九年三月の入居開始を目指している。

この国際混住寮は、単なる学生の居住の場ではなく、外国人留学生と日本人学生が学習スペースや交流スペースを共にしながら生活し、国際コミュニケーションを形成していく「学びの場」として位置付けられる。居室は、生活の中で交流が自然と生まれるよう六つの個室がリビングやキッチン、トイレをシェアするユニット・タイプ(六室一ユニット)で、計二百十六室・三十六ユニットを設置予定。各ユニットからアクセスしやすいよう一階中央部には、レストラン、リビング、キッチン、プレイルーム、学習室など共用空間が設けられ、周辺の屋外空間とともに学びのコモ

ンズを重視した構成となっている。

さらに、共用空間での各種活動が有機的に展開できるよう、寮生として住みながら他の寮生を支援する学生を「レジデント・アシスタント(RA)」「ジュニア・レジデント・アシスタント(JRA)」として、それぞれ六人、計十二人配置。各々のレベルのコミュニケーションが適切に形成・運営されるよう、日々の生活支援も含めたさまざまなサポートを行う。また、今回の整備は、大学側への財政的な負担を抑制し、充実した国際混住寮の整備・運営を行うために、建物譲渡特約付きの定期借地権を活用したBOT方式を選択し、外部事業者の力を活用するPFI的手法を本学において初めて採用。今後、本学との密接な連携のもと、事業者が主体的に設計・施工・管理・運営を行う。

明治大学はこれまでも、海外からの交換留学生のための宿舎として「和泉インターナショナルハウス」を整備するなど、外国人留学生の受け入れを強化してきた。今回の国際混住寮の開設を契機に、外国人留学生はもちろん、日本人学生の国際的な教育環境を充実させ、大学全体の国際化をさらに加速させていく。

●校友会

二〇一七年度 定時代議員総会を開催

明治大学校友会は七月三十日、駿河台キャンパス・リバティホールで二〇一七年度の定時代議員総会を開催した。代議員総会は校友会の会則が定める重要事項を審議・決定する会議で、当日は代議員総数六百人中、委任状を含め五百七十一人が出席。大学からは来賓として、柳谷孝理事長、土屋恵一郎学長をはじめ役員が出席した。

総会は、物故校友への黙とうを捧げた後、徳丸平太郎副会長の開会の辞でスタート。冒頭、あいさつに立った向殿政男校友会会長は、全国津々浦々、韓国・台湾からも多数代議員が参集したことに謝辞を述べた上で、校友会の最近の取り組みを報告。地方出身者向けの「つなげー紫紺のつたすき」奨学金の給付などを例に挙げながら、「大学への財政的な支援はもちろん、皆さんが各地域で活躍していただくことも大事な支援だ」と校友会への一層の理解と協力を求めた。さらに、明治大学が多方面から評価を受けている要因は「自分を律し、人の意見に耳を傾け、どんなことにも恐れず前へ進むことのできる人間力」とし、「歴史とともに脈々と受け継がれたこの明治魂をこれからも継承していきたい」と、さらなる母校支援を呼びかけた。

続いて、村山富市名誉会長からの激励のあいさつの後、来賓を代表して柳谷理事長、土屋学長、波多野宏一連合父母会長がそれぞれ

れ日頃の感謝や祝辞を述べた。

その後、議長団・議事録署名人らを選出して議事に入り、昨年度会務の報告と決算、二〇一七年度事業計画・予算などについて審議し、それぞれ提案どおり承認された。最後は、万歳三唱と校歌斉唱、齋藤柳光副会長による閉会の辞で締めくくられ、総会は盛会のうちを終了した。

### ●過去最多の六万人超が来場

#### 二〇一七六オープンキャンパス

明治大学の各キャンパスを受験生らに開放し、大学生活の一端に触れてもらう真夏の恒例行事「オープンキャンパス」が八月、駿河台・生田・中野の三キャンパスで開催された。今年のオープンキャンパスは、文系学部が中心の駿河台で八月二～四日の三日間、理系学部が中心の生田で八月八～九日の二日間、国際日本学部・総合数理学部中心の中野では八月二十二～二十三日の二日間実施され、七日間で過去最多となる六万人以上の高校生や保護者らが来場した。

各キャンパスともに、大学説明会、学部ガイダンスや模擬授業、入試説明会、在学生や教職員に直接質問できる個別相談コーナーなどが盛況。在学生が構内を紹介するキャンパスツアーや、実際に研究している現場を見学できる研究室・ラボツアーも人気で、最新

の研究成果を体験するなど、多くの参加者にぎわった。ほかにも、学科・ゼミ単位での学生発表や海外留学の体験報告会、保護者対象の説明会などにも多くの人が集まり、参加者は多彩なプログラムを通して、大学での学びを肌で感じていた。

### ●国家公務員総合職試験

#### 明大から二十八人が合格

人事院は六月三十日、中央省庁の幹部候補を目指す国家公務員採用総合職試験の二〇一七年度最終合格者を発表。明治大学からは二十八人(前年度二十七人)が合格した。うち女子は三人(同五人)。

明大の合格者の試験区分別内訳は、院卒者試験で「行政」三人、「工学」一人、「農学・水産」二人(うち女子一人)の計六人。大卒程度試験で「政治・国際」二人、「法律」七人、「経済」六人(うち女子一人)、「工学」三人(うち女子一人)、「農業科学・水産」四人の計二十二人だった。

二〇一七年度試験の申込者数は二万五千九百九十一人(前年度比千二百九十二人減)、合格者数は千八百七十八人(同百三十三人減)で、倍率は一・〇倍(同〇・一<sup>ポイント</sup>増)。女子の合格者数は四百八十四人で、合格者に占める割合が過去最高となった。出身学校別の合格者数内訳では、国公立大学千三百九十七



人、私立大学四百七十五人、その他（外国の大学等）六人。合格者の出身学校数は全体で百二十一校、その中で十人以上の合格者を出した大学は二十八校だった。

### ●OB社長

▽リョーサンⅡ栗原宏幸氏（一九八五年商学部卒・五十六歳）

▽朝日信用金庫Ⅱ橋本宏氏（一九六九年政経学部卒・七十歳）

### ●ビートたけし氏・星野仙一氏・松尾雄治氏が母校に集結

#### テレビ番組「ボクらの時代」の収録で

映画監督・タレントのビートたけし氏（二〇〇四年特別卒業認定）、(株)楽天野球団取締役副会長の星野仙一氏（一九六九年政経学部卒）、元ラグビー日本代表でタレントの松尾雄治氏（一九七六年政経学部卒）の校友三氏が八月十六日、フジテレビ「ボクらの時代」番組収録のため、駿河台キャンパス・リバティタワーを訪れた。

毎週さまざまなジャンルで活躍する三人が集い、多彩な話題や事象を取り上げて、トークする同番組。このたび、ゲスト三人が本学校友であるつながりで、リバティタワー二十三階岸本辰雄ホールでの収録が実現。同年代の三氏によるトークでは、明治大学に入学し

た経緯や野球・ラグビー、大学での学生生活などが話題になり、思い出話に花を咲かせた様子だった。この番組は九月三日に放送。

### ●サッカー日本代表・長友選手が母校を訪問

#### 土屋学長・柳谷理事長を表敬

サッカー日本代表選手で、インテルナツィオナーレ・ミラノ（イタリア・セリエA）でも活躍する長友佑都選手（二〇〇九年政経学部卒）が七月五日、駿河台キャンパス・リバティタワーを訪れ、土屋恵一郎学長、柳谷孝理事長を表敬訪問した。

大学役員・役職者を交えた懇談の中で長友選手は、体育会サッカー部在籍時、故障後にリハビリに専念して二年生でレギュラーメンバー入りを果たした体験を「誰よりも努力することを学んだきっかけ」と振り返った。また、世界トップレベルのリーグで戦い続ける秘訣については「一番大切にしているのは精神力。日本とは比べ物にならない厳しい環境の中で、メンタルを強く保たないと、技術や能力が発揮できない」と熱く語った。

それを受けて土屋学長は、「世界中で活躍するプレイヤーを輩出したことは明治大学の誇り」、柳谷理事長は「さらに活躍して世界一のアスリートになっていただきたい」とそれぞれ激励し、さらなる飛躍に期待を込めた。

### ●地域産学連携研究センターから

#### 「外出支援ロボット」が誕生

生田キャンパス・地域産学連携研究センターを拠点に、理工学部・黒田洋司教授のロボット技術を応用した研究が進められていた、高齢者にとって安心安全な「外出支援ロボット」がこのほど、(株)トーキンオール（川崎市）、神奈川県立産業技術総合研究所、川崎商工会議所、川崎市産業振興財団、神奈川県中小企業団体中央会によって共同開発された。

この外出支援ロボットは、黒田教授の高度な自律移動ロボット技術を応用し、障害物や下り段差の回避機能、操作の誤りを防ぐ運転支援機能を搭載した新しい形のハンドル付き電動車いす。特殊な六輪機構を備え接地性・走行安定性にも優れており、高齢化社会に向けて、足腰が弱ってきている方の外出支援や、自動車運転免許返納者の移動手段としての実用化を目指している。今回の開発は、神奈川県内の「さがみロボット産業特区」が企業や大学などの技術を最適に組み合わせ商品化を目指す「神奈川版オープンイノベーション」による共同開発プロジェクトとして本格化。黒田教授の研究シーズを基に、トーキンオールが試作車の開発を主導した。同社は二〇一四年に明大との間で共同研究を開始し、昨年七月より生田キャンパス内にある地域産学連携研究センターを拠点とすること

で、黒田教授らとの研究密度が向上。今回、製品化に向けた第一段階として、走行デモンストレーションを行うまでに至った。

七月二十日、生田キャンパス・地域産学連携研究センターの多目的室で行われたデモンストレーションでは、下り坂や段差などが設置された仮設のコースを技術者の運転で走り、障害物を認識して停止するシステムや六輪の安定性など、従来型の電動車いすにはない特殊性が披露された。今回の公開に際し黒田教授は、「高齢者にとつて簡易な操作で走行できる便利なものを作るために自分の研究が応用できると思った。製品化に向けて越えるべき山は多いかもしれないが、近い将来、多くの人の役に立つことができるのではないかと楽しみにしている」と今後の展開に期待を示した。

●明治大学研究フォーラムを初開催

「メタンハイドレートの環境インパクトと先史人類社会」

研究・知財戦略機構は八月六日、明治大学の研究を社会に還元することを目的とした研究フォーラム「メタンハイドレートの環境インパクトと先史人類社会」を、駿河台キャンパス・リバティホールで開催した。

初めての試みとなった今回のフォーラムは、重点領域プロジェクトを推進するガスハ

イドレート研究クラスターと資源利用史研究クラスター、さらに黒耀石研究センターと農学部研究者が、個別発表とパネル討論、ポスタープレゼンテーションを通して、明治大学における共創的研究の一端を発信。聴衆約二百人が熱心に耳を傾けた。

小川知之副学長（研究担当）の開会あいさつに続いて行われた個別発表の前半では、まず、ガスハイドレート研究クラスター代表の松本良研究・知財戦略機構特任教授が「メタンハイドレートは地球環境の変動といかに関わってきたか？」と題して発表。これまでの研究成果はもちろん、燃料資源だけではなく文明の発展という視点で人類史に貢献している点について解説した。続いて、研究・知財戦略機構客員研究員で千葉大学大学院理学研究院の戸丸仁准教授が「日本海の海底から噴き出すメタンガスの行方」について、大学院農学研究科博士後期課程三年の青木伸輔さんが「海洋観測による海面からのメタン放出評価…ガスブルームによる大気への影響」について、メタンハイドレート研究の現状を海底・海上を切り口にそれぞれ報告した。

休憩を挟み後半では、農学部の登尾浩助教授が「陸域からのメタン放出」、黒耀石研究センター長で資源利用史研究クラスター代表の阿部芳郎文学部教授が「暖かな海と森の文化・縄文―ヒトは温暖化にどう適応したか

―」、東京大学総合研究博物館の米田穰教授が「人類進化のなかの縄文人…人骨の化学成分でみる温暖化への適応」について、それぞれ異なった視点から研究内容を説明。環境変化が人類社会に与える影響など、地球化学、考古学、人類学が時間軸を越えて、複層的に絡み合う様子を明らかにした。

発表者六人が登壇したパネル討論では、会場から寄せられたさまざまな質問に答えながら活発な議論が行われるなど、明治大学における共創的研究の深化が図られた。

●二〇一七年度「科学研究費助成事業」

過去最高二百九十五件が採択

独立行政法人日本学術振興会から、二〇一七年度の科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）の交付内定が発表された。明治大学の二〇一七年度の採択件数は新規と継続分を合わせ二百九十五件（前年度比六件増）、金額は6億7041万円（同4108万円増）で過去最高を記録した。

科学研究費助成事業（科研費）は、全国の大学や研究機関で行われている研究活動に必要な資金を研究者に助成する仕組みの一つである。人文・社会科学から自然科学まですべての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を段階に発展させることを目的

とする「競争的研究資金」である。専門分野の近い複数の研究者による審査を経て、独自の・先駆的な研究に対する助成が行われるのが国最大規模の競争的資金制度で、社会の困難や障害を突破する画期的な研究成果を多く生み出している。

科研究費の中核となる研究種目は「基盤研究」で、研究期間や研究費総額によってS・A・B・Cの四つに区分されている。また、若手研究者の自立を支援する研究種目として「若手研究」を、学問の新たな領域の形成や挑戦的な研究を支援するものとして「新学術領域研究」や「挑戦的研究（開拓・萌芽）」を設けている。

#### ●震災復興支援センター

福島県新地町で学生ボランティアが活躍  
「やるしかねえべ祭」に三十九人が協力

震災復興支援センターは八月四日～六日にかけて、福島県新地町に学生ボランティアを派遣。同町で八月五日に開催された「第七回やるしかねえべ祭」の準備・運営補助に明大生三十九人が協力にあたった。

この祭りは、東日本大震災からの一早い復興を祈念してはじまったもので、毎年町内外から三万人以上が来場する町の一大行事となっている。明治大学は二〇一二年の第二回から学生・教職員が運営ボランティアなどと

して参加している。震災から六年あまりが経った今年は、ボランティアを体験し、被災地の現状を知る機会を提供するために参加者の学内公募を行った。百人近い応募者の中から選出された学生たちは、前日準備から撤収までの三日間、それぞれの役割を懸命にこなし、祭りの成功に貢献した。

やるしかねえべ祭実行委員会からは「今年も多く明大生の力を借りることができ感謝している。ぜひ来年も協力をお願いしたい」と今回の開催に向け期待の言葉が述べられた。福島県新地町は東日本大震災による甚大な被害を受けた地域の一つで、明治大学とは二〇一二年一月二十六日に震災復興に関する協定を締結している。

#### ●北京大と卓球交流イベントを開催

明治大学は、北京大との大学間交流の一環として、卓球選手による交流イベント「MEIJI SPORTS スペシャル〈卓球〉」を七月十三日、駿河台キャンパス・リバティタワーで開催した。

一階の紫紺ホールに設置された特設コートでは、体育会卓球部の森蘭政崇選手（政経4）、酒井明日翔選手（政経3）、渡辺裕介選手（商3）、龍崎東寅選手（商1）の四選手と、北京大、北京体育大のそれぞれ三選手がシングルス三試合、ダブルス一試合のエキシ

ビジョンマッチで対戦。土屋恵一郎学長や北京大の高松副校長ら両大学の役員・役職者をはじめ、観戦に訪れた明大生ら約千人を前に、六月の世界卓球選手権ドイツ大会の男子ダブルスで銀メダルを獲得した森蘭選手を中心に、白熱した試合を展開した。

当日会場で配付された限定の記念Tシャツを身にまとい、間近で卓球の試合を観戦した明大生たちは、力のこもったラリーや鋭いスマッシュが決まるたびに大きな歓声を上げるなど、会場は熱気に包まれた。普段の試合会場とは違う雰囲気の中でプレーした森蘭選手は「多くの方に観てもらうことができ、自分も楽しんでプレーすることができた。このような機会を提供していただけたことに感謝したい」と清々しい表情で語った。

明治大と北京大は、兒玉圭司卓球部総監督を中心とした長年にわたるスポーツ交流などを起点として二〇〇九年五月、「学術交流協定書」を締結。学生・研究者間の交流はもろろん、北京大校内の「明治大学マンガ図書館閲覧室」設置や、国際日本学部による「日本マンガ・アニメ文化先端講座」の開催など活発な連携交流を実施している。

#### ●卓球部

団体インカレ 二連覇達成

体育会卓球部は七月六日～九日、第八十



七回全日本大学総合選手権・団体の部（北海道立総合体育センター）に出場し、昨年に続く二連覇を達成した。

明治大学は一回戦からストリートで勝ち進み、決勝へと進出。決勝では、春季リーグで王者の座を奪われた専大を相手に龍崎東寅選手（商1）が初戦を制し、続く森蘭政崇主将（政経4）も逆転勝ち。森蘭・渡辺裕介（商3）組のダブルスは敗れたものの、最後は酒井明日翔選手（政経3）が完勝し、3-1で悲願の優勝を決めた。これで明大はインカレ史上最多タイの十七度目の優勝となった。

### ●東京六大学野球秋季リーグ戦

#### 九月九日、早大戦で開幕

東京六大学野球の二〇一七秋季リーグ戦が九月九日に開幕した。春季は五位に沈んだ硬式野球部の巻き返しに期待がかかる。

明大は、開幕一週目で早大と対戦。一勝一敗で迎えた三回戦、延長戦を制して勝ち点を奪った。この後の戦いに勢いをつけたいところ。ユニバーシアード日本代表にも選出された竹村春樹選手、齊藤大将投手（ともに政経4）、渡邊佳明選手（政経3）、森下暢仁投手（政経2）を中心にリーグ制覇を目指す。

### ◆七月例会出席者

青木幹則、青柳勝栄、秋山隆敬、坪昭二、

浅井宏、浅倉晴司、安達明正、阿部倫明、有賀隆治、石川かおり、石川均、石原道勝、泉山和久、伊東正博、同ご友人、上西紘治、宇川一夫、潮田伊佐夫、内川雄一郎、梅津章、江成健一、大野正美、大前実之、大村託現、岡田茂、奥岡征彦、鬼塚和也、勝俣正義、金子圭太、栢森靖、苅部彰夫、河合陽一郎、河村博、神林光、清野明男、杳掛英二、小島清治、小林稔、齋藤柳光、坂田貞夫、坂田英夫、佐藤和正、佐藤仁、澤野太嘉嗣、甚野捷、杉浦伸二、鈴木紘一、鈴木隆志、鈴木紀行、関孝夫、関根均、高澤徹、武田宣夫、田

口幸隆、田村駿、樽見俊之、常泉邦彦、角田裕一、天童美德、同ご友人、徳丸平太郎、富井征也、富水流孝二、鳥居伸年、長岡信裕、中川敏洋、中正雄一、長瀬幸泰、中根武、長堀守弘、中村豊、並木洋一、西山武夫、二宮充子、長谷川進一、同ご友人、埴英幸、馬場範夫、平川清、同ご友人、深代尚夫、同ご友人、福田和彦、同ご友人、前川一郎、眞壁八郎、榎野泰、同ご友人、松崎優子、三浦栄治、水江博、向井眞一、室井恵明、山田朝彦、米山明広

### 【編集後記】

阿久悠さんが旅立って十年になる。久しぶりにアカデミーコモン地階の記念館に展示されている自筆の歌詞を読ませてもらった。やや右肩上がりのくせ字が奔放に躍っている。こちらの思い入れもあるが、作品ごとに筆致や筆圧が千変万化しているように見える。

全てありふれたサインペンで書かれている。万年筆などではない。それと知ったのは、「作品とともに母校明治に帰りたい」という遺志を大学にお伝えして調査のため伊豆・宇佐美の書齋にご案内した折だった。座卓の名入り原稿用紙の上に最期まで使っていた一本が何気に置かれていた。筆立てには未使用の十数本が寂しげに残る。ご家族によると日記や趣味の絵心を楽しむために若いころから使い続けてきた唯一無二の万能筆記具だったらしい。

阿久さんは三十歳で本格的な作詞活動に入る前に、憲法十五条と題して自らの作法を決めている。締めめの十五条には、「歌は時代とのキャッチボール。時代の中の隠

れた飢餓に命中することが、ヒットではなからうか」とある。時に吹く風や人の心の移ろいに用意周到に対処していた。広告マンだっただけにマーケティング的な才能にも長けていたのだろう。ただ、こと歌詞については一字一句たりとも妥協をしなかった。「心を通過しないものは言葉とは呼ばない」。ストイックなまでに自らを戒めていた。「何事も行（ぎょう）にしてしまふところがあつた」と盟友が証言する。四十年、五千曲以上。言葉の魔術師は百発百中のヒットを期待され続けていたに違いない。伝説化された今、そんな苦闘が語られる機会は少ない。作詞家の心得の中で「（筆記具は）指同然のものがない。なければ指同然になるまで書く必要がある」と教えている。たかがサインペン、されどサインペン。全てを知っているようだ。

明治大学は校歌が好きで選んだと聞く。  
〈撞くや時代の暁の鐘 文化の潮みちびきて…〉

（齋藤 柳光）